

どれみなのはなし

そのはちてんご



もくじ

まえがき

ぬくぬくめがね 3

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。

またやっしまいました。』はちてんご』です。3

回連続の』てんご』。『ごめんなさいです

と、いうわけで、』てんご』のおやくそく、あとがき・言い訳なしの小断のみです。薄い本で申し訳ありませんが、わずかでもお楽しみいただけましたら幸いです。

なお、薄いとはいえ、愛情だけは容赦なく盛り込んでありますので、恥ずかしい断が苦手な方は本を閉じることをお勧めいたします。

それでは『どれみはなし』そのはちてんご。どうぞご覧くださいませ。

イラストレーション……久遠一海

酒処 金井亭亭主

猫好敬白

ぬくぬくめがね

「ん」

くちびる、きゅっとしめて、くびをちょこっとか
しげて、

「んふ♡」

そのまま、にっこり。

しばらく、そのまま見てみる。にっこりの顔、な
んだかへんだわ。エアコンつけたばかりで、まだ
部屋の中は寒いんだけど、それだけじゃなくて。

なにか 待ってるみたいな笑顔。

「なんだか、ばかみたい」

言ったとたんに、鏡の中の顔がしゅん、としちゃ
う。やだな、こんな顔。

「こんなだから、言われちゃうのかしら」

ぎゅっ、って手をにぎったら、なにかつかんでた。
開いた手のひらに、オレンジ色のタップ。

「うん。変身したって、だめよ。わたしは、わ
たしなんだもの。」

タップをしまつて、かわりに机に飾つてあるハト
笛をにぎつてみた。つめたかった笛が、だんだんあつ
たかくなつてく。

ちよつと吹いてみたら、むかしとおんなじ音がひ
びいた。

わたしはもうすこしだけ吹いてから、笛を見てみ
た。そこに、いつもの顔がかさなつてく。

「どう思う、まさるくん？」

「ふあ あつっ」

うう、よお寝たはずなのに、なんでこない眠いん
やろなあ。

いろいろあったけど、あたしらみんな進路も決ま
たし。はづきちゃんを受験も終わって、魔法は
もう決まったも同じやし、心配することなんて、な
んもあらへんのかなあ。

そんなん考えながら学校の坂道登つとつたら、寒
そうなコートがとぼとぼ登つてん。あれは
「はづきちゃんやんか。どないして ぶっ!!」
あたしは思わず吹き出してしもた。

なんでかて、はづきちゃんの顔。目えにクマつくつ
て、口やほつべたひくひくさせてんやから っ!!

「あゝいゝちゃ〜ん!」

あかん。わるたらあかん思ても、止まらへん。

「か、かんに、かんにんや、はづきちゃ っ!!」

くくくくっ!!

「もうーそこまで笑わなくなつて!!」

はあ、はあ。あゝ、なんとか落ち着いたわ。

あ、あかん。フォローしとかな。

「ごめんなあ。せやけど、はづきちゃんだからやで。

いつもかわいい顔なのに、いきなりこないな顔見せ
られ っ!!

がばっ!!

「それ、どついう意味!?!」

な、なんや? いきなりあたしの両肩つかんで、ジ
ロツてにらんでん。いつものはづきちゃんと、ちゃ
うわ。

なんも言えずにぼあつ、としとつたら、はづきちゃ
んが「あつ」て言つて、手えはなした。

「ご、ごめんなさい。先、行くわね」

ぱたぱた た そんな音でもしそうなスピードで、
はづきちゃんが駆けてつた。

なんや、朝っぱらから気まずうなつてもつたなあ。

そやけど、なんでや ?

「あゝいちゃん♡」

「なに、ぼくつと立つてるの?」

背中の方から声かけられて、あたしはぼん、と

手えたいた。

「どれみちゃん、おんぶちゃん。ちょい、はづきちゃんのことので聞きたいんやけど」

「そう言われれば、ちよつとへんだったよね」

どれみちゃんが、うんうん、てうなずいとる。

「受験だったし、ピリピリしててもしかたないかな、って思ってたけど」

「でも、終わってから沈んでるわね」

おんぶちゃん、おでこに指あてて考えてた。けど、ぱつと目えひらいてあたしを見回してん。

なんや含み笑いなんかしとるなあ。なんやろ？

「受験も終わって、魔法の方だってもう決めてるし、でしょ？ ほかにはずきちゃんが悩むことって

あれしかないんじゃない？」

「あれ、って？」

「なんや？」

どれみちゃんと声が重なってもうた。それ見ておんぶちゃん、しばらく笑ってたけど、いきなり顔近づけて言った。

「ねえあいちゃん、ちよつとはづきちゃん尾行してみてくれない？」

2時間目の休み時間になって、はづきちゃんが一人でトイレ行つとつた。

朝がアレやったからか、あたしにはなんも言わへん。つけるには好都合や と思つたんは甘かった。

いつも使てるトイレに、はづきちゃんがあらへん。しゃあないから近くで待つてんと、中から声が出てきよつた。

「ねえねえ、決めた？」

「なにが？」

「とぼけないの。遠足のグループよ」

遠足う？ ああ、社会科見学やな。

そついや小学校最後やからいうて、全クラスこつたませで、グループ組むとか言うつとつたな。

「最後だもんね。ぜつたい、いつしよになるぞあ」

「あたし、抱きついちゃおうかなー、なぐんてきやあきやあつて、やつかましいなあ。」

「だれ、だれに？」

「ん、そつねえ」

「1組の矢田くん、でしょ？」

「あ、ずつるーい！ あたしも狙つてたのにいん？」

「早いもん勝ちですう」

「よーし、あたしも狙つちやお」

「バターン、つてな音たてて、トイレから4人くらい、やつかましいのが出てつた。」

ああ、なんか、嵐が去つたつちゆう感じやな。せ

やけど、

「なあるほど、な」

矢田くん、けつこつう人気あつたんやなあ。そか。そんではづきちゃん

「つちゆうことは、や」

「問題は、矢田くんね」

うあつ！！

耳元でいきなり声したんで首だけ振り返つたら、肩にあご乗せたおんぶちゃん目え合つてもつた。

おんぶちゃんだけやない。どれみちゃんも、ももちちゃんまで後ろにおるやん。いつの間に

「それじゃあ、ももちゃん。とりあえずハナちゃんおさえといてくれる？」

あたしの肩からあご降ろして、おんぶちゃんが言うた。言いながら、あたしにウィンクしとん。

ま、せやな。

「へ？なんデ？」

ん、ここはあたしも共犯にならな、な。

「こんなん聞かしてみい、ハナちゃん魔法でなんと
かしよ思うで。」

「だれかずつと見てなかったら、止めようあらへん
やん?」

「ああ、もちちゃんがうんうん、てうなずいてるわ。」

「ああ、そつだネ。わかつたワ」

「そのまま教室に戻つてく。良心痛むわあ。」

「行つたわね」

「ふう。三人そろつてため息ついてまつ。あたしら、
悪人にはなれへんなあ。」

「もちちゃん、自分もおさえられちゃつたの気づい
たら、怒るわよ?」

「あはは。そうかもしれへん。せやけどしやあない
やん。」

「もちちゃんも、恋愛関係ニブいもんね」

「当たつて碎け続けとるどれみちゃんにだけは、言
われとうないセリフやな。そうは思つたけど、とり
あえず黙つとこか。」

「なんか知んねえけど、クラスの空気が違つて
見える。」

「もう卒業するだけだと思つてたのに、女子はサイ
ン帳だのなんだの騒いでるし。それが落ち着いたら、
今度は社会科学見学のグループ分けできゃいきゃい言っ
てやがる。昼メシのあとくらい、静かに寝かせてく
れよ」

「矢田くん」

「ん?」

「片目だけ開けてみた。　なんだ、春風かよ。」

「はづきちゃんって、かわいいよね」

「なんだ!?!」

「かわいいでしょ?」

「オレの机を両手でつかんで、じりつ、とせまつて
来てやがる。」

「なんだよ、いきなり」

「いいから、目の前行って『かわいいね』ってひとこと言っただけばいいのー!」

やれやれ、こいつもぎやいぎやいの仲間かよ。

「なんでお前に命令されなきゃなんないんだよ」

どうせ、見学のグループの話だろ。どうだつていいじゃねえか。そんなのよ。

「つたく、もう! 矢田くんは、はづきちゃんかわいく見えないの!?!」

「べ、別に」

「ほら、どもつた!」

いきなり言われて、あせらないヤツがいるかよ。

ああ、もつめんどくせえ。

「どうでもいいじゃんか。それとも、藤原に頼まれてもしたのかよ」

ため息つきながら言ったら、黙りやがった。手がぶるぶる震えてやがる。

「ばかあつ! はづきちゃんが、そんなことするわけないでしょ!!」

おー、いつてえな、耳。ま、罰としちゃ、こんなもんか。

春風、ぶんすかしながらそのまま席戻っちゃまった。

ああ、巻機山がこっち見てんな　　しゃあねえ。図書室にでも逃げるか。

昼休みの図書室は、あんま混んでねえ。オレは少ない机のなかでも一番奥にすわって、目をつぶった。

頭に浮かんでくるのは、やつぱさっきの春風の言葉だ。卒業近くで全クラスこっちや、なんて言ったら、そりゃオレだつて女子が騒ぐくらい、わからないわけじゃない。

けど。

「グループ、かあ」

「ほんで、矢田くんまださそってへんの?」

近くで声がした。目を開けたら、目の前の席にだ

れか座ってる。

「んあ?」

目をぱちぱちしてよく見たら、ほおづえついた妹尾だった。

「せやから、はづきちゃん」

やれやれ。またかよ。

「つたく! おまえら、オレが藤原さそつまでつきまとう気か!」

つい大声になっちまったけど、

「ここ図書室やで。ま、あたしは別にかまへんけどな。んで? さそわへんの?」

妹尾はびくともしねえ。なんか、ムカつくな。

「おまえらに言われてなんか、さそいたくねえよ」

「へへえ。ほな、なんも言わへんかったら、さそうんやな?」

「なんでそつなるんだよ!」

にらみつけてるオレに、妹尾は手をひらひらさせて、「いやいやあ、矢田くんはオトナやからな。あた

しらがやいやい言わへんでも、自分でさそえるんやな、てな」

くつ、男だったら一発ぶつ飛ばしてやりてえけど、
「てめ、けんか売ってんのか!」

なんとかおさえて、そんだけ言った。そのとたん、妹尾の表情が変わった。

「そう言われたくないんやったら、さつさとさそいな?」

オレの目、まっすぐじつと見つめてきてやがる。

「はづきちゃん、ああ見えて、待ってるんで?」

だめだ。まともに見れねえ。

「だから、さそわねえんだよ」

「んあ?」

いけねっ! つい

「へ、べつにっ!!」

オレは立ち上がって、そのまま図書室出ていった。出る前にちょっとだけ後ろ見たとき、妹尾が笑ってたよんな気がする。

「あら？こっち先に来たの？」

図書室を出て音楽室に入ったところで、オレはまたつかまつちまつた。

「またかよ」

ピアノに座った瀬川。校内一の人気者が昼休みに一人ってことは、だ。

「また、って あ。あいちゃんたちには、もう言われたのね？」

オレの行きそつなとこ、みんな見張ってる、ってことか。

「ああ。どうせお前も、おれに藤原さそえ、って言うんだろ」

ちくしょお。もう、どうにでもしやがれ！

「本当にさそいたくないなら、言わないわよ？」

「ん え!？」

瀬川の声が、変わった。図書館での妹尾みたいに。

「自分じゃわからないみたいね。さそいたくてしょうがない、って顔してるわよ」

そんな、ばかな !

「ふふふ。顔ふいたってダメよ。ね、そんな顔してたら、みんな気になってしょうがないじゃない。わたしたち、はづきちゃんの友達なんだから」

瀬川はそのまま、音楽室を出てった。言うことは言った、って感じた。

オレはしばらく、そこに突っ立ってた。

午後の授業のチャイムが鳴っても、もうしばらく、そこに立ってた。

授業が終わった思たら、はづきちゃんすぐに教室出て行ってもった。

どれみちゃんたちは、ハナちゃんM A H O 堂に運んでるし、おんぶちゃんはお仕事と。

あたしは、どないしよかなあ。おんぶちゃんの話
やと、矢田くんはなんとかなりそうや、っちゅうと
こやけど

「やりー。じゃ、あたし一番ね」

「ちえー、しょうがないか。じゃ、ハデに抱きつい
てきなよ」

あん？

ああ、朝の子たちや。またトイレで騒いどんのか。

「でもお、矢田くんにはカノジヨいるでしょ？」

うんうん。あたしは思わすうなずいたわ。

なんちゅうたかて、校内公認カップルやからな。

本人たちはともかく、やけど。

「藤原さん？ やーね、あんなのカノジヨのわけな
いじゃない。オジャマよ、オ・ジャ・マ」

「暗いし、トロいし、いいとこないよねー」

「かわいっぽく見せてるだけだもんねー」

ケツタケタ笑いよって ああ、あかん。カバン
の金具が曲がつてん。強く握りすぎてしもた。

「まあ、あんなん注意したって、しゃあないんやろ
けどな ん？」

トイレから出てくの見送りながら、ひとり言う
とつたら、目の端に見慣れたもんが映った。

あれ、あそこにおんの ああ、もう。期待つら
ぎらんちゅうが、なんちゅうか

「はづきちゃん、なにやっとなん？」

「き、きやあああゝあつっ!!!」

——きくくん

あ、ああ、あたまおかしなつたかと思たわ。あ痛
たたた

「ちよい、はづきちゃん。おどかさんといてえな」

「ごごめ ごめんなさー」

目えなみだ浮かべて、ちいちゃくなつてん。ん、
まあ、わかるけどな。

「ま、こないなとこ居てもなんや。ベランダ行こか」

あいちゃんに連れられて、学校のベランダまで来ちゃった。

それにしても、あーあ。あんなとこ見られちゃうなんて

「はづきちゃんの、ええとこかあ
びくつ。」

体が勝手に動いちゃう。さっきの話、やっぱりみんな聞いてたのね。

「わたし、いいとこなんて ない」

そう。暗いのはほんと。トロいのもほんと。勉強だって、一番なんかじゃない。わたしは

「ほな、なんであたしは、ここにおるんやろな？」

「え？」

思わずあいちゃんの顔、見上げてた。あいちゃん、まっすぐ空のほうを見る。

「あたしだけやない。どれみちゃんも、おんぶちゃ

んも、ももちゃんもや。なんもええとこない子あ、なんて思てたら、みんなそばにおるわけないやん」

それは そう、かもしれない、けど。

「ねえ、いつも通り、わたしたちでいっしょ、でいいんじゃない？」

「それでも、矢田くんが他の女の子に抱きつかれたりしたら、イヤなんやろ？」

わたしは、口が開けなくなっちゃった。

「ん、あたしじゃあかんか やっぱ、はづきちゃんを一番よお知つとる人に訊くべきやな」

「え？」

わたしがきよとん、としてると、あいちゃんが耳打ちしてきた。

「せやからな、こないして」

ふんぶん。 そんなことでもいいの？

わたしから離れたあいちゃんは自信たっぷりで、ここに笑ってる。うん。やってみよう !

「んん」。どしたらいいかなあ？」

ハナちゃんをマジヨリカに押しつけて、うちに帰ったけど、ベッドの上にひっくり返っても、なにもする気にならないや。

「要はぎ、はづきちゃんの方からさそえばいいんだよ」
うん。自信持って、ぐいぐい押しつけてば、矢田くんなんて

そこまで考えて、まくらにつつぷした。それができたら、苦労しないよねえ。

「どれみおねえちゃん、おフロあいたよあ」
ぼつぶの声。いつもより、なぐんか頭にくる。

「あたし、いらな〜い」
ちよつと静かになったと思ったら、また声がひびいた。

「きたない女の子は嫌われちゃうぞあ〜。ただでさえ、振られつぱなしだっというのにさ」

んだとあ〜！

「ぼつぶ！あんなねえ！！」

つて、ドア開けた瞬間

ぼつぶ！

ぶつ！なに、これ バスタオルじゃん。

「そあ言われたくなかったら、ちゃんと入んなよじゃね」

ばたん。つてとなりのドアが閉まった。

ぼつぶのやつ お姉ちゃんに気いつかうなんて、10年早いつてえの

そう思っいながら部屋に戻って、パジャマと下着そろえてたら、

カン、カン

つてまど叩く音。

「あれ、はづきちゃん？」

まどの外、見習い服姿のはづきちゃん浮かんでた。

まだ開けて、中に入ってきたはづきちゃんが、緊張した顔であたしの目じつと見てる。

「どれみちゃん、なにしとったん の？」

へ？

この言い方 あ、そうか。まああたあいちちゃんだな？ むかし一度バレてるのに、同じ手つかうなんて、結構ドジだなあ。

ん、ま、いいや。ひとりで考えてるのも疲れちゃったし、つきあっちゃえ。

「どしたの、はづきちゃん」

「ねえ、どれみちゃん。わたしのええところこって、どこなん なのかな？」

も、ばつればれじゃん。あいちちゃんも大変だなあ。

それにしても、いいところか はっはるん。あいちちゃん、はづきちゃんどうやって元気づけたらいいか、考えつかなかったんだな。

よあし。はづきちゃんとは幼馴染の、このどれみさまが、どんといいセリフ考えたげようじゃないの!!

いの!!

「はづきちゃんのいいところ？ 数え切れないよ。

やさしいところでしょ、まじめなところでしょ、いっしょけんめいなところでしょ、それにかわいい♡」

あ、あれ？ なんか、きげん悪くなっちゃった。

そっか、このくらいなら、あいちちゃんだってすぐ言えるもんね。

よあし、それじゃ、とっとき

「でも、いっちばんいいところ、ってたら、やっぱめがねかなあ？」

「めがね??」

きよとん、って感じで、目がまんまるになってるよ。あいちちゃんってば、演技派だあ。

「ん。はづきちゃんのめがねってき、なんかぬくぬくしてるんだよ」

「めがねが ぬくぬく？」

うくく。考えてる、考えてる。でも、まだわかんないかなあ。あいちちゃんだって、いつも感じてる

はずだよ？

「うーん うまく言えないけど なんかね、どんなに落ち込んだときでもさ、はづきちゃんのめがねの顔見ると、すっごく安心するんだあ」

ああ、黙ったまんまで、じーっとあたし見てる。なんだか、目がうるうるしてるみたい。

「いつやあ、そこまで感動されちゃうと、照れちゃうじゃん。」

「だからさ、いつでも、いつまでも、はづきちゃんには、めがねかけてて欲しいんだ。」

気になる人に、そのめがねでど〜ん！ってぶちあたっちゃいなよ。あたしは へへ。よく壊れちゃうけど、はづきちゃんのめがねは、無敵だよ!!」

あはは。本人じゃない、ってわかってると、結構いろいろ言うっちゃうなあ。あ、いっけない。念おしとかなくちゃ。

「って、さ。あんまはつきり伝えちゃだよ、あい

ちゃん」

ハンカチで、ちよっと目こすってたあいちゃんが、あれっ、て顔であたし見てた。

いい演技だけどき、あたしには通じないよ。

「もう、わかってるってば。本人の目の前で、あんなこと恥ずかしくって言えるわけないじゃん。だから、それとなく伝えて、ね？」

「ちゃんと伝わってるわよ、どれみちゃん」

え??

ふふふ、って笑ってる。ちよっと、これって

「まさか、本当に、はづきちゃん!?!」

口元に、軽くにぎった手あてて ちがう。これ、絶対、あいちゃんじゃないよ!?

「うん。あいちゃんに教わったの。あいちゃんっぽく話しかけたら、きくとほんとのこと言ってくれるって」

う うわああああっ!!

「わ、わ、わっ！いまの、いまのなしっ!!」

「ありがとう、どれみちゃん。大好き♡」

あいちゃんの、ばかあ〜っつ!!

次の日は、遠足のグループ分けの日。

午前の授業が終わってから、わたしはどれみちゃんたちとは離れて、教室でめがねを拭いていた。

きゅつきゅ、きゅつきゅ

うん。これなら、完璧。よし、それじゃ

立ち上がろうとしたとき、

「あ、ねえ、矢田くう♡ え!!」

ろっかから声がした。

教室のとびらから、ちょこつと顔だけ出してみたら、まさるくんがこっちに歩いてきてる。

すたすた、すたすた。

「ちょ、ちょつと」

この間の女の子のわきを通り過ぎて。

わたしは、教室から出て、まさるくんの前に立った。

「藤原、ちょつといいか」

わたしは、笑って言った。

「グループは4人以上よ。あとはどうするの?」

するするっ、て言葉が出てきたわ。顔も、いちばんいい笑顔してるの、自分でわかる。

「長谷部と工藤には声かけといた。4人いりゃいいだろ?」

わたしがうなづいたら、まさるくん、うしろ振り向いて、

「さつき呼び止めたヤツ、用ならさつきと言ってくれねえか?」

あゝあ、さつきの女の子、真っ赤になってどっか行っちゃった。また、影でいろいろ言われるかも知れないわね。

そう思っても、ぜんぜん気にならない。気持ちがあつても軽い感じ。

そう、わたしのめがねは、無敵なんだから――

――おしまい――

「じゃ、打ち合わせ、行くか」

まさるくん、上着ぬいでカバンにつめちゃったわ。寒くないのかしら。

「まさるくん、寒くないの？」

「ん」

空いた手で、わたしの手をにぎって、そのまま体育館に歩き出しちゃった。

平気なのかしら。あ、そうだ。

「ねえ、まさるくん。わたしね、めくめくしてるんだって。」

まさるくんも、そう思う？」

ぎゅっ、てにぎった手が、熱くなった。

「めくめくじゃねえよ」

上をみたら、まさるくんの顔、手とおんなじだった。

「暑いんだよ　はづきといると」

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。